

『教育統計』1959年2月（文部省調査局統計課）

教育総合計画と統計

矢口新

(1)

日本人は何年もかけて計画的な仕事をするのはへたなのであろうか。私は必ずしもそうとは思わないけれども、ソビエトや中共が何か年計画というのをやっているのに、日本にはそういうのがみられないといわれると、なるほどそうかとも思う。しかし国鉄だとか、発電所だとかの建設作業はいずれも何か年の継続作業で、やはり何か年計画といわれてよいものである。近代産業の大会社・工場などもそれぞれ何か年計画というものを実際に実施しているようである。だから必ずしも何か年計画というのがへただとばかりも言いきれないと思う。

けれども北海道の総合開発計画などはどうもかくのうわきがあつて、ほんとうのところはどうなっているのだからよくわからないようである。そういうところをみると、計画的な仕事はへたなのかということも考えられる。

計画がへたではなくて、それを実施するのがへたなのかもしれない。あるいは総合的な計画やその実施ということがへたなのかもしれない。机上プランなどということばがあるが、机上プランがじょうずだというのは、計画がじょうずといったらよいのか、へたといったらよいのか。こんなことを考えていると何が何だかわけがわからなくなるが、ともかく、こと教育に関しては何か年計画などということはトントみられないし、きわめてお粗末な政策が多いことだけは確かなようである。短兵急に勝負を決することがすきなのもかもしれない。ところが、こと教育そのものはこれがなかなか短兵急にいかないしろものである。そうなる日本人は教育などということを考えるには適しない国民なのかもしれない。

(2)

一時総合開発ということがやかましく言われたが、最近は下火のようである。総合開発ということがやかましく言われたころ、私も富山県の総合開発に少しばかり関係した。総合開発の中の総合教育計画に参加して仕事をしろということであつた。総合開発の中で教育がどう取り扱われるかということは私も興味があつたので喜んで仕事をさせてもらったが、やはりいろいろ勉強になった。まずわかつた事は、予定したことはあつたが、総合開発の中で教育などということはなかなかその座が与えられないということである。総合開発事業の中に、はじめは教育を包含するかどうかが問題になつたそうである。けっきょくは総合開発という仕事を一般の人々に啓発するのに社会教育は役だつてあろうというようなことで、計画の一環の中に教育計画を入れるようになったのだといういきさつも聞いた。

この話を聞いたとき、私は教育についての日本の人々の考え方の特色がよくあらわれていると

思った。総合開発というのをどう解釈するかはいろいろ問題のあるところであろうが、行きつく所は一つの社会改造計画である。富山県について言えば、たとえば、電源開発をし、その電力を利用して工業を起す。また水利をよくして、農業の形態をかえる。このようにして産業の姿をかえていくと、最後には富山県の人々の働く形態やくらしがかわってくるであろう。そうなると必然的に人間がちがってこなくてはならぬ。人間の考え方や、能力の発揮のしかたが新しい産業に見合うようにならなくてはならぬ。こうなってはじめて総合開発というにふさわしいであろう。

ここまで考えると、総合開発の根底には人間のエネルギーの育成ということが絶対に必要である。だからある意味から言えば、総合開発は人間の能力の育成、つまり教育によって決するとも言えるのである。しかし一般にはそういうようには考えられていない。もっと簡単に主として、施設の、物的なことだけが考えられている。教育を総合開発の計画の中へ含ませるかどうかの問題になったというのは、総合開発が皮相に考えられていたからであろう。

(3)

さていよいよ総合教育計画をたてることになる、なにしろ10年間の歩みを計画するのであるから、まったく閉口した。そのころ二三の県で総合開発計画も行われていたので、それらも参照してみたが、そのどれにも教育計画なるものは存在しなかった。もっとも農業や産業の計画の中に、これこれの人間を養成する必要があるとか、これこれのことを教育することに力を入れるなどという簡単な文句はかなり多くはいつていた。しかしそういう教育をどのように行うかというような教育の計画はどこにもなかった。考えてみるとこれはなかなかむずかしいことであった。

なぜなら人間の計画は、施設をつくったりするような物質的計画とはだいぶ様子のちがったところがある。富山の総合開発計画の立て方も、どの部門も大きくわけて、施設計画と非施設計画という二つにしている。この中の施設計画というのは、比較の見通しが立つ。教育の分野でもたとえば、老朽の校舎がどれだけあるか、それを今後10年間にどのようにして改築していくかなどということが施設計画にあたるのだが、これは10年間の歩みを考えるにしても比較的やさしいことである。

こういうとき、役にたつのはなんといっても統計であって、統計なくしては総合計画などというものは成り立たないといってもよいほどその力を発揮した。ところが、非施設計画の分野になると、統計はもちろん大いに役にたつのであるが、われわれのもっている統計的処理の能力では片づかない事があまりにも多くありすぎる。そういうものをいったいどう考えたらよいのかは、いまだに私にとって問題になっている。

たとえば、農業高等学校の生徒数は今後どのようになっていくであろうかというようなことを推定してみる。これは農業高等学校の施設を今後どういうようにしていくかを考えるには一つのたいせつな基盤になることがらである。これを推計するのに統計は大いに役立つ。これまで数10年の間に農業高等学校の生徒はどのように変化してきたかなどということをしらべると、今後の動向も察することができる。また県の農業の動向はどうなってきたか、とくに農業人口はどのように変化してきたかということも調べてみる必要がある。また農家の労働人口はどれくらいで交

代していくかということも統計でかなりのところまで推定できる。このような数学を組み合わせると、農業高等学校の生徒はどれくらいになるかはほぼつかめるのである。そして農業をやる農家の子弟がすべて農業高等学校へはいるとすればこれくらいの生徒数、今までのように農家の子弟の何割かが入学するとすればこれくらいの数字というようなことはかなり詳しく考えることができる。

ところがそれからが、なかなか問題である。たとえば教育の方針をどうするか、これからの農業がどうか変わるから、これからの農民にはこれこれの技術が必要である。それにはどうしても農業高等学校の教育をすべての農家の子弟に与えなくてはならぬというようなことがきめられるとする。これをきめるにもなかなか問題はあがるが、ともかく仮にこれがきまったとして、さてそういう方針で進むとなっても、そのためには、すべての農家にその子弟が高等学校にはいるような考え方をもってもらわなくてはならぬ。そういう考え方をもってもらうにはまた種々の方策を講ずる必要がある。たとえば経済的な負担を軽くするということも考えられる。その他いろいろあるが、最後は人間の考え方に属することになる。高等学校へはいるというふんい気が農家の人々の全部にでてくれば、はじめて、全部の子弟が高校へはいつてくるから、これこれの数で生徒数がふえていくということも明らかになり、学校の施設をどのようにつくっていくかも考えられることになる。

ところがこの最後の考え方の変化ということがなかなかつかめない。教育関係の人々がそういう農民の考え方をかえる努力をすることによって、どれくらいかわっていくのか、このへんになるとはたと行き詰まってしまう。

上のはほんの一例であって、まだまだ述べたりないが、教育計画にはこういうことが非常に多いのである。そしてしかもその点がはっきりしないと、たいていのことは計画にならないことが多い。施設の計画といっても、けっきょくは人間の問題に帰着するものである。どういう教育が行われて、どういう人間がそこに生れてくるかということがはっきりしないと、やはり計画というものに空々しさがでてくるのである。

そういう所を統計的に少しでも処理するようなことが、私にできるとよいのだがと何度思ったかしれなかった。統計の専門家に聞いてみるのだが、そういう人々は、今度は教育問題について考え方の筋がなかなかわかってもらえなくて、どうもピッタリしない。私はつくづく教育と統計の問題は大いに勉強しなくてはならないと感じたことであつた。

(4)

最近学習指導要領の改訂が行われたが、この結果、教育の実体がどれだけかわつたであろうか。文部省から出される印刷物が、多くの教師に理解されるされ方はおそらく千差万別であろう。あの印刷物が出たから、それで教育の姿がかわつたと考えたら大きなまちがいである。

教育の実態をつくりあげているものにはさまざまなものがあつて、教師の考え方もあるれば父兄の考え方もある、学校の環境もあれば、教科書をつくる人々の考え方もある。それらがよつてよつて、教育の実態をつくりあげているのである。これらのものの組み合わせり方や、それによつ

て出て来た教育の実体をなんとかはっきりあらわすような道はないものだろうか。そういうことができるようになると、たとえば、科学技術教育ということと言っても、すぐ打つ手ははっきりわかってくるのである。つまり総合的な対策が生れるのである。

ところが現在は、だいたいそういうことが感で行われているのである。いまいろいろ打たれている手も、いずれもそれぞれ多少は意味があるのであろうが、といてどれも、何かくつの底から足のうらをかいているような感じのものが多い。

そういう点を総合的に計画し、実施するような本格的な研究が行われてもよいのではないだろうか。どれもが短兵急で弥縫（びほう）策で、つぼにはまらないで、外回りをまわっているような感じがする。

統計がその場合どれほど役にたつかわからないが、しかし、今のようにいい加減な勘でやっているよりは、はるかに明らかなことがわかるにちがいない。政治家がもっと統計を尊重し、統計を限界まで使って、教育を計画するようになってほしいと思うのである。教育の総合計画が行われなければ教育がだんだんぐあいが悪くなっていくのではないかと思うが、それには、教育を科学的に見る考え方がもっと強くならなければならぬ。そして統計がそれに一役買う必要がある。

(国立教育研究所員)